高校物理 | 研究所

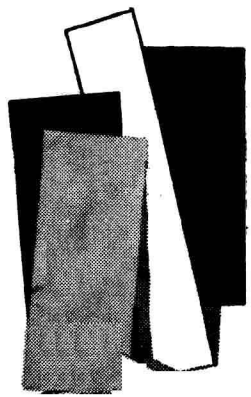
総三集

ACT PLAY SERIES

・柴田・内木編

高校演劇一幕劇集

第三集



未來社

本書に収録した作品の無断上演を禁じます
上演の際はかならず未来社にご連絡下さい

高校演劇一幕劇集（三）

1959年10月31日　第1刷発行

検印
廃止

定価 200 円

編者代表　柴田北彦
発行者　西谷能雄

東京・文京・表町

発行所
株式会社　未来社
東京都文京区表町78番地
振替東京87385番　電(92)6966・(929)0454

落丁乱丁本はおとりかえいたします

光陽印刷・佐山製本）

高校演劇一幕劇集　第三集　目次

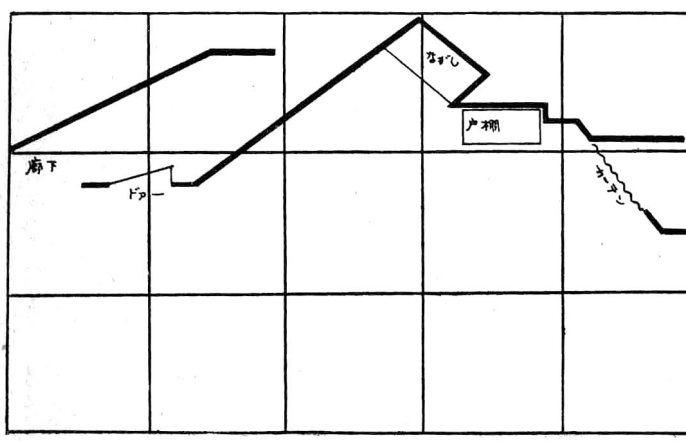
シンメルブッシュのたぎる夜に……原　博……三
イワナガヒメ物語……町井陽子……五五
最初の人々……芳谷龍作……八五
峠……若林ひろし……一二五
親子雷……榊原政常……一五五
解説……柴田北彦……一七五

装置図　金子国義

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

シンメルブッシュのたぎる夜に

原　博


なだし
戸棚
廊下
ドアー
ガーデン

キャスト

清水（主任看護婦）四〇
永井（看護婦）三五
野中（看護婦）二二
八田（看護婦）二二
秋元（看護婦）二七
友野（看護婦）二二
林（実習生）一九
星野（実習生）一九
牧野（患者）二七
田原（患者）一〇

ある病院。外科病棟の看護婦詰所内部。正面壁面に、下手から病室標示灯。電話機。黒板。水道。流し。戸棚が配置されている。
下手に入口。廊下。
上手はスクリーンで仕切られている。室内には事務机が四ツ。二ツずつ向い合わされておいてある。机の上には一輪ざし、電気スタンド、本立、その他カルテ、日誌、事務用品等。
ある冬の夕方から夜にかけて。

幕開く。
戸棚の前で看護婦八田（二二）が輸血の準備をしている。上手の机で主任看護婦清水（四〇）がカルテを調べている。その向いの机では秋元（二七）がカードを繰りながら食餌伝票に記入している。

秋元　主任さん、十一号の谷さんと六号の伊東さんは朝食なしですね。
清水　ええ。そうです。
秋元　伊東さんと谷さんは絶食……（とカードを別にする）
清水　ああ、あのね。
秋元　ハイ。
清水　田村さんはもう一日二日、流動食を続けて下さいね。
秋元　あら？
清水　・奥山先生がもう少し様子をみてからっておっしゃっていますから。

秋元　あ、そうですか。ハイ。

看護婦永井（三五）が中年の婦人患者を案内してくる。入口で、

永井　こちらが看護婦詰所になっておりますから、御用のあるときは何でもおっしゃって下さい。それから、先刻お教えしました枕許のボタンを押しますと（壁を指して）あそこの標示灯がつきますから、詰めている者がすぐ病室へ伺います。夜中でも、いつでもかまいませんから、御用のときはボタンをお押しになって下さい。

患者　ハイ、有難うございました。何分宜しくお願い致します。

永井　こちらこそ、どうぞ。

患者　では……（去る）

永井入ってくる。

八田、輸血の器具を持って出て行こうとする。

清水　八田さん。それ、谷さんですか。

八田　ハイ、そうです。

清水　永井さん、谷さんの輸血お願いしますね。

永井　（八田に一寸気がねしながら）ハイ。

清水　（八田に）それ、永井さんにやって貰って下さい。（と再びカルテに眼をとおす）

八田　（不服だが）ハイ。（永井に）お願いします。

永井　（明るく）ええ、じゃあ（と戸棚から注射器具函を出して）こっちをお願いします。五号の武田さんと八号の太田さん。

二人器具を交換して出ていく。

八田　ハイ。

清水　松本さんのカルテは？

秋元　ハイ。整理してあります。（机上のカルテを渡す）

清水　（受取って眼を通しながら）松本さんの退院、案外早かったわね。もうひと月くらいかかると思っていたら。

秋元　ええ、松本さん、とても喜んでいましたわ。明日すぐにお国へお帰りになるんですって。山形の温海（あつみ）なんですってね、あの方。いいですわね、お国が温泉場なんて。

清水　そう、便利ね。（とカルテから目を離さない）

実習学生、林、星野入ってくる。交換したシーツをかかえている。

林　（秋元に）シーツ交換終りました。

秋元　有難う。さっきのと一緒にして、帰りに被服倉庫へ持って行って下さい。伝票書いておきますから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

林　ハイ。

学生達、上手スクリーンの蔭に入る。

清水　林さんと星野さん。もう遅いからお帰りなさい。

二人　（スクリーンの蔭で）はい。

清水　秋元さん、あなたは？

秋元　ハイ。もう終ります。

清水カルテを閉じて、他のカルテと一緒に下手の机へ運ぶ。
永井入って来る。

清水　カルテと日誌、ここへおきますから。

永井　ハイ。

永井、戸棚の前で次の注射の準備をはじめる。林と星野、シーツを重ねて持って出てくる。二人とも帰り仕度、カーディガンを白衣の上に着ている。

二人　（永井に）有難うございました。

永井　御苦労さまでした。

二人　（秋元に）有難うございました。

秋元　御苦労さま。（伝票を渡して）じゃ、これ伝票。お願いね。

林　ハイ。

受取る。そして清水主任のところへ来る。

二人　主任さん、どうも有難うございました。

清水　御苦労さま。実習も、今日で一応終りですね。

二人　ハイ。

清水　どうでした。

林　ハア。

二人顔を見合せて微笑する。

清水　初めての実習で、馴れないから大変だったでしょう。

林　ハア、三週間がとても短く感じました。

清水　忙しかったから？

林　ハア、

星野　初めのうちは夕方になると膝がガクガクして来て、夜とてもよく眠れました。（林に）ね。

林　ええ。

清水　もっともっと忙しい時がありますよ。

林　本当に先輩の方達はよく体がつづくと思いました。（星野に）ね。

星野　ええ。でもいろいろな事が覚えられてお教室よりずっと勉強になりました。

清水　そう、教室で習うことと、実習と大分勝手が違うでしょ。

二人　ハイ。

清水　いくら書物を暗記していても、それが実際に役立たなくてはなんにもならないんですよ、私達の勉強は。教室の優等生が必ずしも現場で良い看護婦になれるとは言えないですわね。

二人　ハイ。

清水　医学は毎日進歩していくんだし、新しい薬は次から次へと出てくるでしょ。いくら私達は先生の指示で取扱うからといっても、看護婦は看護婦で、それに対する正しい知識を持っていなければ正しい処置がとれないでしょ。それに、どんな忙しい勤務にも耐えられるように、しっかり体を鍛えておかなければならないし、大変なのよ、このお仕事は。しっかり勉強しなければね。

二人　ハイ。

清水　どう。患者さんのお世話をしてみて、何か感じたことは？

林　ハア、私、「完全看護」っていう意味が……

清水　よく判らない？

林　ハア……

清水　完全看護っていうのはね、患者さんのお世話をするっていうことが、唯、医療に関することだけじゃなくて、付添さんや、お家の方がついていなくても済むように、何から何まですっかりお世話してあげること。つまり、病気は患部の医療処置だけで癒るというのではなく、入院中の生活全部を通じ

て、療養しなければ、正しい療養とはいえないという見地から……

星野　ハイ。それは分るんですけど。

清水　じゃあ……

星野　どこまでやってあげればいいのか、その限界が……

清水　限界？　限界なんてない筈だけど……どうして？

永井出ていく。

清水　何か……？

星野　いえ、別に何もあったわけじゃないんですけど、……唯、そう思っただけなんです。

清水　（不審気に）そう。

清水　八田さん、貴女、今夜は準夜勤？

八田　いいえ、準夜勤は野中さんです。

清水　そうだったわね。

八田　（言訳のように）野中さん、少し遅くなるそうですから、私……

清水　あ、そう。

八田スクリーンの蔭に入る。

清水　（林達に）何か、嫌だなあって思ったことありませんでした。

林　ええ……（一寸言いよどんで）……患者さんの中でひやかす方があって、それがとても嫌でした。

清水　そう。男の患者さんの中に、よくありますね。永い入院生活で、馴れきっていて、退屈している人など。

林　そういう時、とても困ってしまうんですけど……

清水　そう。そういう時はね、知らん顔をして、自分がしなければならない事だけをてきぱきと片づけてそんな人を相手にしないのが一番いい方法なの。つまりスキを見せないって事が必要なの。……そうね、看護婦として一番難しいことは、やっぱり患者さんに対する態度ね。「親しんで狎れず。親しまれて軽んぜられず」って言うのかしら……これは言葉では教えてあげられない事で、やはり長い間に自分で悟っていかなければならない事なのでしょうね。

二人　（うなずく）

秋元　（整理を終って伸びをする）やれやれ。

清水　秋元さん。すみました？

秋元　ハイ。

清水　じゃ、帰りましょうか。

秋元　ハイ。（肩を叩きながら、スクリーンの蔭へ）

清水　（林達に）私も一緒に帰りましょう。

立上ってスクリーンの蔭へ。

ブザーが鳴って六号室の標示灯がつく。

八田、標示灯を見上げ、出ていく。

永井入ってくる。流しで器具を洗う。スクリーンの蔭から、秋元、派手なジャンパーに手を通しながら出てくる。

秋元　永井さん、お願いします。

永井　御苦労さまでした。

秋元　ノンちゃん、遅いわねえ。

永井　そうね、どうしたのかしら。さっきの電話では一時間くらい遅れるとはいっていたんだけど。

清水、仕度をして出てくる。

清水　お願いしますね。

永井　はい御苦労さまでした。

清水　どう、谷さんの具合。

永井　は。今よく眠っているようですけど少しブルック（血圧）が落ちているようです。

清水　そう。……今夜九時頃が峠かな……（と一寸思わし気だが）……ま、心配ないでしょうけど、若し容態が変るようなことがあったら当直の先生に（と言いかけて、笑い出す）まあ、まるで新しい方にお願いしてるみたい。貴女がいるんだから、その点に心配ないわね、経験豊富な貴女ですもの。

永井　（笑って）充分気をつけます。

清水　じゃお願いします。

永井　お休みなさい。ご苦労さまでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo